



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

聖体・希望の約束

私たちはキリストの運び手

こうして私たちはキリスト・フォロイ(キリストの運び手)になります。私たちは内にキリストを携えているのです。キリストの御体と御血。キリストの死と復活。死に対する生命の勝利。キリストの運び手、これは毎日毎日の私たち一人ひとりの姿なのです。今日は、この事実を特に大切に、宣言したいものです。

「パンは一つであるから私たちは多数であっても一体である。みな一つのパンにあずかるからである」(コリント①10・17)と使徒は書いています。聖体は教会という共同体の中に——キリストの体の中に私たちを産むのです。

地上の全大陸にわたって、メシアの民、すなわち新しい契約の民——自らを聖体で養い、聖体を通してキリストの体として永遠の生命の真理に与る教会は進んで行きます。教会はこの神の食物と飲物に感謝しながら、自らの内にキリストの御体と御血を携えています。これこそ偉大な信仰の秘義です。

新たな喜びと感謝をこめて聖体を拝領しましょう。聖体には私たちの希望の根拠があるのです。そこで、使徒ペトロと共に私たちがも宣言しましょう。「御身だけが永遠の生命のみことばをお持ちです」と。主よ、御身だけののです。アーメン。(聖体の祝日に)

1

(…)天からくだったパンのまわりに集まり、聖体行列を続けながら、私たちは受肉されたみことばと共に(永遠の生命の真理)を宣言します。私たちがとり囲んで大都市の生命が脈打っています。この生命はやがて過ぎ去ります。このローマの街も、地上のどの街と同じように、過ぎ去る地なのです。ローマは死の門口へ向かって、生命の脈を打っています。幾世代幾世紀の間、ローマは歴史の歩みを続けながら、死という現実を濃く生きてきました。

キリストがカファルナウムで言われたことは時を越えて有効な言葉です。今このローマにおいても。「まことにまことに私は言う。人の子の肉を食べず、その血を飲まなければ、あなたたちの中には命がない」(ヨハネ6・53) 聖体について宣言するために、キリストは出発点として死という現実を使われました。荒野でマンナを食べた全ての人の遺産となったように、死は地上の全ての人の遺産なのです。こうして、私たちは人間とその歴史、その秘義の永遠の問題の中心に入ります。キリストは、私たちに(自己の内に生命を持つこと)と(生命を持たないこと)との二者択一を要求されます。

3

ここで私たちは、よい知らせの核心そのものに出会います。それは希望の頂点であって、死の必然性に勝るものです。すなわち「私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠の命を有し、終わりの日にその人々を私は復活させる」(ヨハネ6・54) 福音書——よい知らせ——は現世の死から永遠の生命へと導くものなのに、それを聞いた人々は「むずかしい話だ、そんな話に耳が貸せようか」(同6・60)と言います。当時のカファルナウムの聴衆はこのような

5

私たちは何者なのでしょうか。跡継ぎなのです。神に選ばれた人々の歴史の中で徐々に築きあげられた信仰の大きな秘義における跡継ぎなのです。私たちは、最後の晩餐の間に使徒たちの靈魂の中で明確に形造られたこの信仰の「跡継ぎ」なのです。

6

キリストの過越の秘義の中で日に日に成長するよう努めましょう。中でもその特別な表れの一つ、つまり一致という点で成長する

「あなたが王位を受けて帰られるとき、私を思い出してください」(ルカ23・42) 王であるキリストの祭日にあたり、善良な盗人の祈りは、キリスト教の逆説をうまく言い表しています。磔に処せられた罪人の、キリスト御自身とその使命への信仰です。自分と

政治・社会思想の衰退に悲しむ

ユダヤ人の指導者や兵士らはキリストを嘲ります。もう一人の盗人も神を罵ります。(ユダヤ人の王)という称号が冷やかしかつ半分になザレト人(イエズス)に与えられます。イ

「あなたを王位を受けて帰られるとき、私を思い出してください」(ルカ23・42) 王であるキリストの祭日にあたり、善良な盗人の祈りは、キリスト教の逆説をうまく言い表しています。磔に処せられた罪人の、キリスト御自身とその使命への信仰です。自分と

ユダヤ人の指導者や兵士らはキリストを嘲ります。もう一人の盗人も神を罵ります。(ユダヤ人の王)という称号が冷やかしかつ半分になザレト人(イエズス)に与えられます。イ

同じように刑を言い渡され、見るからに無力で瀕死のイエズスを信じ、改心します。

ユダヤ人の指導者や兵士らはキリストを嘲ります。もう一人の盗人も神を罵ります。(ユダヤ人の王)という称号が冷やかしかつ半分になザレト人(イエズス)に与えられます。イ

同じように刑を言い渡され、見るからに無力で瀕死のイエズスを信じ、改心します。

エズスは荒野で三度誘惑を受けましたが、今はゴルゴタの丘の上で三度挑発を受けます。「もし選ばれた者なら」もしユダヤ人の王なら「自分で自分を救え」と。

善良な盗人のみがイエズスを信じますが、勇氣と希望をもって呼びかけます。彼はイエズスが救い主であると認めます。やがて神の子が来られ、生命の国を治められることに希望をおいています。彼は、神が「すべてのものを和睦させ、子の十字架の御血によって、平和にさせ」るため選ばれたイエズスを信じます。(コロサイ1・20)

信仰告白の手法がここにあります。キリスト教信仰の厳肅さの意義がここにあります。すなわち、神の子が人となり、その死と復活の秘義によって新しい王国は築かれます。イエズスは善良な盗人に答えて「今日あなたと私とともに天国にいるであろう」と言われました。希望は実現しました。契約と交わり(一致)は今日キリストによって与えられるのです。

この国のキリスト教の歴史の豊かさは多くの聖人、教会人、思想家、芸術家の数をもとにわが国に誇りがあります。しかし、一方この歴史は、寛大に「主の家」を建設した多くの無名の人々によって作られてきたのです。

何世紀の間には様々な困難がありました。ある人は信仰から遠ざかり、またある人は教会に反抗して立ち上がりました。今から四百年前には、刷新された社会の基盤となるべく人道的思想がキリスト教に反駁し

て広く叫ばれました。しかし時を経て今考えると、あのよう熱狂的に自由、平等、博愛が叫ばれたのは、ある点でキリスト教信仰に根づいた文化が実を結んだからだと言えるのではないのでしょうか。

フランス訪問中、私はフランス国民が教会の生命に、宣教、思想、芸術、また司牧に、貴い貢献をしたことを思い出しました。何百年もかけて築きあげられた伝統を受け継ぎ、現代は、キリストへの忠誠を新たにする大事業にとりかからねばなりません。キリストは「死者の中から最初に生まれお方である。それはすべてにおいて第一の者となるためである。(コロサイ1・18)

マリアの信仰と教会の誕生

「彼らはみな聖霊に満たされた。(使徒行録2・4) 今日(過越の秘義の力)が教会の誕生においてはつきりと示された日です。

今日は、イエズスが復活の後に使徒たちに語られた言葉「聖霊を受けよ」(ヨハネ20・22)が、エルサレムに住んでいる人々と巡礼者の目前で実現した日です。

使徒行録に次のように記されています。「彼らはみな聖霊に満たされ、霊の言わたるまに(いろいろの国のことばで話し始めた)。(2・4) 他国から来ていた人々も、聞いていた者は皆、ただちに使徒たちの話

今日のミサの福音書朗読にあるように、キリストが宇宙の主であることを認めるには幾多の困難を乗り越える必要があります。十字架上のキリストの死を目撃した人々には疑いの念を抑えることができないのです。私たちの周囲にいる人、現代に生きる者は、キリストを疑います。

というよりむしろキリストを無視し、世俗的な物の見方に従ってキリストを抹殺しようとさえします。ヨーロッパのある国では、初め啓蒙思想を受け継ぎ、その思想家たちによって人々は神とキリスト、教会に疑いを抱くようになりました。社会活動の組織化が広まり、教育形態は神とは無関係に展開していったことがわか

を理解しました。それは(宣教の始まり)でした。「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。(ヨハネ20・21)」「行け、諸国の民に教えよ。(マテオ28・19)

教会は誕生の日以来ずっと御子と聖霊の使命に与り、慰め主なる聖霊・真理の霊に導かれて、御子の使命、永遠の救いの福音を宣言し続けます。

エルサレムで聖霊降臨に居合わせた人々は、驚いて叫びました。「私たちは、われわれの言葉で神の偉大な業を宣言している彼らの話を聞いている。(使徒行録2・11) 詩篇は次のように伝えています。

このようなイデオロギー(政治社会思想)は、そのうたい文句通りの平和と幸福をもたらさず衰退の途をたどっています。それでもなお「知性の停滞」「事実上の無関心」という形で考え方の中に後遺症がみられます。信仰の難しさを全て今の時代のせいにするわけではありませんが、社会の大部分が非キリスト教化されていることから、信仰への積極的参加が大層努力を要することとなり、若者のキリスト教的な信仰教育が一層困難になっていることを認めないわけにはいきません。

これらの困難を認めたらからといって悲観してはなりません。却って「主よ、あなたのみ業のおびただしさ……地はあなたにつくられたもので満ちている。……あなたが息を送れば彼らはおびつられ、地の面は新たにされる。(ヨハネ24・30)

五旬祭の日にはペトロを通して使徒たちが宣言し始めた「神の偉大な業」には一つの名前、すなわちイエズス・キリストしか出てきません。「イエズスは主である。(コリント12・3)

これは私たちに示された神の御力を表す唯一の表現です。創造と人類の歴史における神の最も偉大な業は、神の御子、ナザレトのイエズスの御名に結びついています。

神の御子は「奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされ、死ぬまで、十字架上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた。そこで神はキリストを称揚し、すべての名にまさる名を与えられた。

リストの王国の大切さを理解しやすくしています。イエズスが死を越えられたのは、自らに課した苦しみ、大勢の弟子たちの離反、人々の沈黙、指導者らの嘲りという犠牲を払って初めてなされました。しかしイエズスは、大勢の人々への至高の愛ゆえに、自らの犠牲を全うされました。イエズスの犠牲により神は「すべてのものを和睦させ、地にあるものも天にあるものも平和にさせようと望まれた(前出)のです。これが神の国のあるべき姿です。私たちが賛美し、その成就を待ち望み、成就の準備を使命とする神の王国です。(八九・十一・二五、フランスの聖ルイ王教会で)

それは、すべての舌が父なる神の光栄をあがめ、「イエズス・キリストは主である」と宣言するためである。(フィリッピ2・7・9、11参照) 主(ギリシヤ語で「キュリオス」)は、神(アドナイ)のことです。この偉大な真理「神の最も偉大な業」こそ、ペトロが五旬祭の日宣言したことです。聖霊の力によってペトロは宣言しました。「聖霊によらなければだれも『イエズスは主である』と言うことはできぬ。(コリント12・3)

聖霊降臨の日以来、教会は救いの真理、つまり「イエズスは主である」ことを宣言し続けています。「イエズスは主である」と使徒たちが宣言すると、集まっていたあらゆる民族、あらゆる国の人々はそれを聞き、「十字架にかけられ、よみがえられたイエズス・キリストは

聖霊降臨の日以来、教会は救いの真理、つまり「イエズスは主である」ことを宣言し続けています。「イエズスは主である」と使徒たちが宣言すると、集まっていたあらゆる民族、あらゆる国の人々はそれを聞き、「十字架にかけられ、よみがえられたイエズス・キリストは

説教・講話・書簡等の抄訳



聖霊降臨の「なれかし」

一九八七年の聖霊降臨の主日の特別の巡礼の年が始まりました。キリスト降誕後二千年目を目前にしたマリア年のことです。

イエズスの御名を、即ち「イエズスは主である」と聖霊によって宣言したのは、マリアが最初でした。お告げの時のことです。その時、聖霊はひそかにナザレトの家でマリアの上に下りました。原福音で予告されていたとおりに、神の民の歴史と旧約を通して、預言者が語ったとおりに、聖霊によってマリアは、処女のままで神の御子の母となり、信仰によってキリストの全秘義を受け入れました。「聖霊があなたにくだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから生まれる子は聖なるお方で、神の子と言われます」(ルカ1・35)

公会議が教えるように、ナザレトでのお告げ以来、マリアは「信仰の旅路を進み、子との一致を十字架に至るまで忠実に保たれたが、マリアは十字架のもとに立たれたが、これは神のご配慮なしにはなかった。……子とともに深く悲しみ、子のいけにえに母の心をもつてみずから結び合わせ、自分からお生まれになったいけにえの奉獻に心をこめて同意された」(『教会憲章』五八)

お告げの時のマリアのことは「なれますように」は、聖霊によって十字架の下で頂点に達しました。(…)

聖霊の御力による教会の誕生は、聖霊の御力によるマリアの「なりま

すように」によって最後の準備に入っていたのです。

「使徒たちは聖霊降臨の日の前に「婦人たちと、イエズスの母マリアと、その兄弟たちとともに皆心を合わせて祈り続けていた」こと、マリアも、お告げの時すでにご自分をおった聖霊のたまものが与えられるように求めて祈っておられたことをわれわれは知っている。(前出五九)

このように第二バチカン公会議は、聖霊がナザレトでのお告げにおいて処女マリアに降ったことと、五旬祭の日に使徒たちに降ったこととが互いに深く結びついていると教えています。

教会は処女マリアを「模範」として敬いますが、それは聖霊がまずマリアにおいて「神の偉大な業」を成し遂げられたからです。「神の偉大な業」は、聖霊降臨の日から、教会の一部、即ち信仰の内に自らの使命を自覚する教会の一部となりました。

マリアの信仰は、エルサレムの高間から始まった長い旅路を歩む教会を導く星となったのです。(…)

今日は(…)教会の誕生と神の母の信仰との結びつきについて考えましょう。教会は、「人となられたみことばの光のもとにマリアを觀想しつつ、受肉の最高秘義の中に尊敬をもって深く分け入り、自分の花婿にますます似た姿となる」のです。(前出六五)

さらに、教会は自らの秘義の洞察を深めて行きます。これは、慰め主である聖霊がキリストの十字架と復活を通して、地上における人類の歴史の中、人間の心の中で新たにされる秘義です。悪魔の

働きや人間の弱さにさらされており、もつれたり、時には困難に巻きこまれる世ではあるが、その中で聖霊が常に新たにしていく秘義なのです。

それゆえ、人類の歴史の旅路を歩んでいる教会は毎日繰り返して祈ります。「聖霊来り給え…貧しき者の父、恵みの与え主、心の光にます御者来り給え…固きを柔らげ、冷えたるを暖め、曲れるを直くし給え…汚れたるを清め、乾けるをうるおし、傷つけられたるをいやし給え…主の御助けあるにあらざれば人には罪ならざる所なからん」。

このように教会は毎日祈っています。そしてマリアも、ちょうど五旬祭の日の前に高間で祈られたように、教会とともに祈ってください。

聖霊のはからいによって聖母は、

「罪」シリーズ ⑥

墮落した人間の状態

(前号からの続き)

神は人間を不死のため創られた

1 結局、地上における人間の存在全体は、死の恐怖の支配をうけているといえます。啓示によると、それは明らかに原罪と結びついているのです。罪そのものが霊的な死と同義語であり、罪によって人間は超自然的生命の源泉である成聖の恩寵を失ってしまうからです。原罪のしるしとその影響は、あの時以来全

地上を旅する神の民が信仰の歩みを続ける間、キリストと教会の秘義のうち特別な方法で現存されるのです。この民にとってマリアは「確実な希望と慰めのしるしとして輝いておられます」。(前出六八)「全能者が私に偉大なことをされたからです。その名は清く」(ルカ1・49)と賛美を贈られた神の御母はこの「マニフィカト」をとおして教会と強く結び合っているのです。

「偉大なこと」、「神の偉大な業」マリア、そして五旬祭の日に生れた教会。その日使徒と弟子たち、婦人たちは高間に集まっていました。エルサレムでこの出来事に居合わせた人々は口々に言いました。「私たちは、われわれのことはば(神の偉大な業)を宣言する彼らの話を聞いている」と。(八八・五・二二)

人類が経験してきた肉体の死に現されています。人間は神によって不死のため創られました。にも拘わらず暗闇の中への悲劇的跳躍とも思える死が存在するのは、罪の内在的論理から言って罪の結果である神の罰なのです。これが啓示の教えであり、教会の信仰です。もし罪がなかったら、地上での試みの結末はこんなにも劇的なものではなかったでしょう。

不変の教え

人間が創られたのは、幸せになるためでもありません。そして地上における幸せとは、多くの苦しみを免れている状態、或いは少なくとも苦しみを免れる可能性のある状態であったはずで、必ずしも死ぬ必要がない状態という意味で「死を免除されていた」と同じであったのです。創世の書(3・16、19)で神に帰せられていた言葉、さらに聖書と聖伝に現れる他の多くの言葉によってもわかるように、原罪によってこの免除は人間の特権ではなくなりまして、地上における人間の生涯は、多くの苦しみを受け必ず死ぬということになったのです。

2 「神の民のクレド」は、人間の本性が原罪の後もはや「最初に人祖が得ていた状態」ではなく、成聖の恩寵や他の数々の賜をも奪われたために「墮落」したのです。この恩寵という賜は、原初の状態において本性を十全なものとして構成していましたが、ここで私たちは、罪のために失われた不死や苦しみの免除や様々な賜を取り扱うだけでなく、理性や意志という内的性質、すなわち理性とか意志という平素のエネルギーをも取りあげたいと思います。529年にオランジュの公会議が表明したように、原罪の結果人間全体が体と靈魂共々、混乱の中に投げ込まれたのです。そしてこれは、トリエントの教令でもそのまま繰り返されて、人間は悪い方へと変ってしまったと記されています。

3 人間の精神的能力に関して、真理を知るべき知的能力の低下、及び感覚がもの魅力にとりつかれて弱められたり情熱に影響されたりして、理性が与える善の誤ったイメージにさらされたためにおこった、自由意志の弱体化という点にこの墮落をみる事ができます。しかし、教会の教えによれば、これは人間の能力にとって本質的なものではなく、相対的なものであり、絶対的な墮落ではありません。ですから、原罪の後でも基本的な自然的・宗教的真理の数々や倫理的原理を人間はその知性を用いて知ることができ、また善を行うこともできるのです。従って、知性の低下と意志の弱体化についてはむしろ霊的感覚的能力がうけた「傷」として語るべきでしょう。知識と神の愛とのつながりという点でさえも、本質的能力を喪失したのではないからです。

下、及び感覚がもの魅力にとりつかれて弱められたり情熱に影響されたりして、理性が与える善の誤ったイメージにさらされたためにおこった、自由意志の弱体化という点にこの墮落をみる事ができます。しかし、教会の教えによれば、これは人間の能力にとって本質的なものではなく、相対的なものであり、絶対的な墮落ではありません。ですから、原罪の後でも基本的な自然的・宗教的真理の数々や倫理的原理を人間はその知性を用いて知ることができ、また善を行うこともできるのです。従って、知性の低下と意志の弱体化についてはむしろ霊的感覚的能力がうけた「傷」として語るべきでしょう。知識と神の愛とのつながりという点でさえも、本質的能力を喪失したのではないからです。

4 罪の後の本性の状態、及び特に人間は善よりも悪に傾きやすい状態を考え、「罪の火花」について述べましょう。それは原初の完全な状態であった時には本性が免れていたものでした。この「罪の火花」はトリエント公会議で「欲情」とも呼ばれ、キリストによって義とせられた、つまり聖なる洗礼を受けた後でさえも、人間の中に存在し続けるものであると付け加えられています。また、トリエント教令は「欲情」そのものはまだ罪ではないが罪の結果として罪への傾きである、とはっきり述べています。(Da.1515参照)原罪の結果としての欲情は、人間が能力を悪用して犯す様々な個人的罪へ

な状態であった時には本性が免れていたものでした。この「罪の火花」はトリエント公会議で「欲情」とも呼ばれ、キリストによって義とせられた、つまり聖なる洗礼を受けた後でさえも、人間の中に存在し続けるものであると付け加えられています。また、トリエント教令は「欲情」そのものはまだ罪ではないが罪の結果として罪への傾きである、とはっきり述べています。(Da.1515参照)原罪の結果としての欲情は、人間が能力を悪用して犯す様々な個人的罪へ

今日の祭日は、ヨセフとマリヤ、イエズスの聖家族を黙想し、一致による相互理解と完全な愛を賞賛するように招きます。聖家族を模範にすれば、家庭の尊さ、平和な生活の重要性を一層よく理解することができましょう。

聖書の創造の記述にあるように、神は男と女を創り、祝福し、「生めよふえよ」(創世1・28)とおおせになり、家庭を築くよう望まれました。

婚姻の秘跡を通して与えられるキリストの恩寵によって、それぞれの家庭に求められている一致が実現します。キリスト信者の家庭は、イエズスの司祭の祈りに表されている理想を達成しなければなりません。父よ、あなたが私の中に在し、私がある中にあるように、皆が一つになりますように。(ヨハネ17・21)と祈られたイエズスは、自らの犠牲を通して全ての家庭のために一致の恵みを獲得してくださいました。

5 カトリックの教義は聖書と聖伝に基いて説明してきた語を用いて、墮落した人間の本性の状態を定義し、述べています。それはトリエントの公会議でも、パウロ六世の「クレド」においてもはっきりと提示されているものです。けれども

神の御子は託身(受肉)において司祭となられました。司祭職の準備のためには家庭での教育を必要としました。「イエズスは二人に従って生活された」(ルカ2・51)と福音書に記されているように、イエズスはマリヤとヨセフに従われたのです。イエズスが

ナザレトの家庭には御子イエズスと両親との一致、互いに深く理解しあう雰囲気が生れました。家庭の中でイエズスが受けられた教育は、お告げの時に天使が明かしたイエズスの地上での使命を準備するの役に立ちました。家庭での教育が、イエズスの司祭職の実現のため

もう一度ここで注目すべきは、啓示に基いたこの教義によると、人間の本性は「墮落した」ものではあっても、イエズス・キリストによって「贖われうる」存在でもあるということです。だからこそ「罪が増したところには、それ以上の恩寵があふれるばかりのものとなった」(ローマ5・20)と言えるのです。これこそが真実であり、その中においてこそ原罪とその結果について考えなければならぬのです。

このように、司祭の召しだし誕生においてキリスト信者の家庭が果たす大切な役割が明らかになります。もうすぐ開かれるシノドスにおいてこの役割に光があてられ、重要性が理解され、それを促進する方法が考え出されなければなりません。

召しだしは、神の救いの御力と無償の賜による呼びかけです。しかしこの呼びかけを受入れる道が心の中に開かれていなければなりません。精神作用に感化を及ぼすには、この呼びかけが考えと感情と意志の深みに入り込まなければならぬのです。若い人々が呼びかけに気づき、それに答える決意をするには、家庭の環境がとて大切で、全世界の家庭のために祈る今、神の御母であり私たちの母であるマリヤに司祭の召命を増やしてくださいよう、子供を教会に捧げる用意をしている家庭を祝福してくださいよう、お願いいたします。(十一・三十)

司祭の召命と 家庭の役割

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
 一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要
 郵便振替 3-72393